

## 4. 東近江市伊庭の勧請吊の作成

長谷川巴南

2022年1月12日に大濱神社・仁王堂にて行われた、勧請吊作成の様子を見学し、聞き取り調査を実施した。参加者は長谷川巴南（4回生）、鈴木詩織（3回生）である。

作業は午前8時から開始されており、我々は途中から見学に加わった。作業に参加していたのは社中の男性8名で、①勧請縄、②勧請、③小縄の3パーツの製作が同時並行で行われる。例年、作業に参加する社中の方々は固定であり、同様に各々が行う作業も固定であるようだ。

まず①勧請縄は、3本の藁を一定の太さで縛って作る。藁の内部に10mほどのワイヤーを通して、ワイヤーの長さに加えて1m～2mを目処に作成していく。捻った3本の藁を縄として縛う際には、「せーの」と声に合わせて力を入れて縛っており、活気が感じられた（写真1）。縄が長くなれば、仁王堂の梁に縄を吊した状態で縛っていく、縛う者と反対側で縄を固定する者が必要になる。完成したものは端をロープで結び、梁から外し仁王堂の中央桁行の柱にくくりつける。末の部分は、勧請縄の端に藁束を銅線・ロープで固定した後、藁を半分に外側へ折り曲げ根元を丸く成形、ロープで固定し、押切器で20～30cmの長さに切断する（写真2）。その最中に縄作成時にできた継目からはみ出した部分を、ハサミで「散髪」して見栄えを良くして完成である（写真3）。

次に②勧請は、バーナーで竹を柔らかくした後、ステンレスの輪に沿わせて結束バンドで固定する。固定部分に大きなヒノキバ・大幣をつけた竹3本も挟み込み固定、ロープも結び装飾していく（写真4）。

そして③小縄は左右12本ずつ合計24本（閏年は26本）作成する。縛った小縄を等分に折り、上部から1/3程のところまでひとつ結びして、輪ができた状態にし、仁王堂の柱間に通したロープに引っかけていく。輪の反対の2本の端部分には事前に作成していた幣と、ヒノキバを1つずつ各々の端部に挟む。小縄の結び輪を作るのは、輪を切ることで勧請縄にそのまま結びつけることができるためである。

すべてのパーツが揃えば、勧請縄の真ん中に勧請を、その左右に小縄を結ぶ。完成すれば続いてお祓いに入る。勧請吊の前に八足台が置かれ、神饌（神酒・洗米・塩・水）を用意、宮司が祝詞を読む（写真5）。お祓いが終われば、柱から勧請吊を外し、ワーク車にて鉄柱に吊す作業に移る。今年度は、鉄柱が12月のうちに新調されていたため、旧勧請吊を外す作業は完了しており、新しいものを設置するだけであった。しかしながら作業中を通じて大雪・強風の荒れた天候のため、例年以上に労力が必要となった（写真6、7）。

本来、勧請吊の作成作業は女人禁制であったらしいが、時代を経て女性の参加も許容されるようになった。我々も小縄の装飾作業に携わらせて頂いたが、小縄が固く細かく編まれており、幣やヒノキバを挟み込むのにも力や手先の器用さが必要だと感じた（写真8）。

参加者は例年の持ち場にて、淡々と慣れた作業をこなしていたが、縄を縛う、持ち運ぶ、飾

りの位置を調整する際などには和気あいあいと協力する姿が見られ、人が集う場の提供という意味で、勸請吊が果たす役割を再確認できた。興味深かった点は、嶋田直人氏の話によると、「仁王堂在地」の勸請吊参加者は、それぞれ伊庭の中でも別々の町から集っており、平常における地縁的繋がりには稀薄であるということだ。殊更、勸請吊が完成する意義深さを感じる一方で、この作業が次の世代にも繋がって欲しいと願うばかりである。

最後に、突然の見学に際しても我々学生を温かく迎え入れ、作業について学ばせて下さった仁王堂在地・大濱神社の皆さん、見学の手配を整えて下さった嶋田氏に感謝申し上げたい。



写真1 勸請縄を綯う様子  
(撮影 長谷川巴南、以下同)



写真2 勸請縄の末の作業



写真3 「散髪」の様子



写真4 勧請を作成する様子



写真5 勧請吊と神饌



写真6 勧請吊を鉄柱に設置



写真7 設置が完了した勧請吊



写真8 学生が小縄の準備を手伝う